
フェアリー・チルド

鈴寝間着

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリー・チルド

【Nコード】

N0091Z

【作者名】

鈴寝間着

【あらすじ】

元人気映画の子役として出演していた俺、滝川 海斗は友達の小女を撮影中の事故で無くしてしまう。それを境に少年は『勇者君』と蔑まれ、苛められるようになってしまった。

そんな俺のいるクラスに転校生がやってきたんだ。

そいつの名前は『紺野 紫水^{しずい}』、真っ白な髪を揺らしながら俺になんて言ったと思う？

「あなたのための世界があるの」
ふざけるなと思ったさ、だが彼女との出会いが俺を次第に変化させ

てらへ。

すじの病々でファンタジーラブコメディー

てらへもこへ

第1章 STEP ON(前書き)

ふうん、楽しんでいってくださいm()
初心者ですのでお手柔らかに

第1章 STEP ON

幼い時の事を覚えている人は少ないかもしれない。

例えばそれが辛く、苦い思い出でも・・・また幸せな出来事でも年がたつにつれて人は次第に忘れてしまうものなのだろう。

でも僕は覚えている。

あの崖から突き落とされるような思い出を、たった1人で耐えた日々を・・・。

町を歩くだけで「あの子って・・・」と言われ、小学校では顔も知らない人に虐められさえした。

それでも耐えて見せた。鉄の仮面をかぶり、唯一の安全地であるはずの家でも自分を閉ざし続けた。

その苦しみの始まりは小学5年生の夏だった・・・。

僕は商店街を歩いていたんだ。もちろん一人じゃなかった。

隣にはもう名前も覚えていないけど女の子がいたはずだ・・・。

人ごみにもまれ、なんとか端によって一息ついて僕は少女にこう話しかけたんだ。

「今日ってほんとについてないな。そこら中でセールをやってるから人が多いや」

しっかりと握った手にギュツと力を込めると、少女に笑いかけた。

「うん、だね。夏場の暑さに加えてこれだけ人が集まると嫌になっちゃうね」

苦笑といった感じで少女も僕に微笑み返してくる。

人ごみのせいで熱くなった空気は渦巻き、僕たちの額からたらたらと汗が流れた。

「君たち・・・少しいいかな？」

髪を短く切りそろえたいかにも中年な男が突然僕たちに声をかけてきたんだ。

本当に見えているのかと思うほど細い目は僕たちに向けら、見られているこっち側とすれば少し気味が悪かった。

「ごめんね、怖がらせちゃったかな？おじさん怪しい人じゃないから」

明らかにその発言が怪しい・・・。

思わず一歩引く僕たちに困ったように頭を掻くと、スツと内ポケットに手を突っ込むと名刺らしきものを2枚取り出して僕たちに渡してきた。

「おじさんこうゆう者なんだけど、しらないかな」

〇〇映画スカウトスタッフ

前田 菱機りょうつき

「おじさんね、映画のスカウトをやってるんだけど、君たち映画に出てみないかな？」

それはCMでも宣伝されているほど有名な映画で、突然役者の男の子と女の子、の役が二人死んでしまったので募集していると有名な映画だった。

ファンタジー物の映画で小学生～中学生まで今はやりにもなっているほどの超大作だった。

普通オーディションなどで選ばれるものらしいが監督の意見で一般人からもスカウトしてるみたいだ。

「おうちの人と相談して電話してね、名刺に電話番号書いてあるから」

糸目の男はさつさと人ごみに交じると数秒もしないうちに消えてしまった。

もちろん僕たちの親は映画に出ることを賛成してくれた。

理由の一つは親が映画好きだった事と、その時は知らなかったが子

供の将来を思うと役者でデビューしておけば未来は幾分か安全だそう
うだ。
二人笑いながら映画で演技する日々・・・それは酷でもあったし辛
かったけど何より隣にあの子がいたことで、前の日々よりもいつそ
う楽しくなった、ただ砂が流れるように楽しい時間が過ぎていくの
を見ていたんだ。
そのあとに何が来るのかも知らずに・・・。

第一章 Step on

「起きろよ、勇者君よおお!!」
横腹にいきなり激痛が走る。

「寝てねえで、さつさとパンかってこいや!!」
次は逆の横腹を殴られた。

ああ・・・最悪だ。せつかく幸せな夢だったのにぶち壊しやがって。
「・・・・・・・・」
今まで寝ていた机から顔をあげて立ち上がると左右に居る男子を見
る。

そりこみを入れた坊主と髪を赤く染めたロン毛・・・またこいつ等
か。
見られていることに気づいた赤パツは俺に蹴りを入れてくる。

「あああ!？何睨んでんだよ？俺の言うことが聞けねえのかよ、勇
者君よお」
脛をけられてよろめく俺に手を伸ばして胸倉をつかむとグツと持ち
上げる。

赤パツより少し背の低い俺は軽々と持ち上げられると何も言わずま
た見つめ返す。

「金髪だからつてなめてんじゃねえよ!」
剃り込みがまた睨んでると思ったのか頬に一発貰う。

「はあ・・・わかったよ。焼きそばパンだろ」

降ろせと胸倉をつかんでいる手を叩くと地に足をつけてゆがんだネクタイを直す。

そんな冷静な俺にイライラ来ていたのか、みぞうちに一発入れてドアの方に剃り込みを連れて出ていく。

「5分後に屋上で待つてるからな、遅れたら半殺しな」

「勇者ならこれぐら出来るよな」

息も絶え絶えに跪く俺の背中に声をかけて廊下を馬鹿笑いしながら遠ざかっていくのがわかる。

その声が完全に聞こえなくなると今まで嘘のように静まり返っていた教室がにぎやかなものへと変わっていく。

「大丈夫？」

「暴力振るう男子って最低だよな」

「代わりに買って持って来ようか？」

「ホントにムカつくよな・・・あいつ等」

跪く俺にクラスメイトが数人駆け寄ってきて声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。ありがとな自分で行くから大丈夫だって」

口の中で鉄の味が広がるのを無視して購買へと歩き出す。

高校生になっても引きずられる過去・・・俺のあだ名は『勇者君』。

あの映画に出て俺の人生は一変した。映画が続いている内はまだ良かったんだ。

クラスの女子や男子からチャホヤされ町を歩いても良い噂ばかり聞こえてくる。

もちろん、そんな俺に嫉妬を焼く奴もいただろうがそんな奴は気にならないほど楽しかった。

だが俺たちが出ていた映画は一年後に終わりを告げたんだ。

俺の友達、いつも隣に居てくれた少女・・・その子が放送中の事故で無くなったんだ。

俺の手の中で・・・ただ支える事しかできなかった。

皮肉にも俺たちの出た映画はバットエンドだった・・・。

最後は悪役が勝ち、悪役の都合のいい一種の平和な世界になる、そんな物語だったんだ。

最後のシーンで少女の最後のシーンがあったんだ、本当にこの世を離れ行く彼女のシーンが……。

その日を境に俺は蔑まれ、憎まれ罵られるようになったんだ。

そうだろう？ 役立たずの勇者がヒロインの彼女も守り切れず、現実では彼女が本当に死んでいるんだ。

『お前が殺したんだろう？』

『なぜ助けなかった』

そう聞かれても、分からない、知らないとしたら答えようがなかった。

そして憎まれた末に俺についたあだ名が『人間の恥』だったんだ。それが俺の悪夢の始まりだったんだ。

第1章 STEP ON (後書き)

ちよつと投稿方法msしたかな^^;
まだ初心者なのであとがきなんて(いえいえ)
では次の更新まで(さようなら)

1の続きです(新)(前書き)

少し足しました…;

迷惑をおかけしてすみません。

1の続きです(新)

「・・・きて、・・・起きてよ。・・・ねえ起きてよ！お兄ちゃん」
隣から飛んできた声に驚いて目を覚ました。

「ああ、優華おはよう。今何時？」

昨日殴られた頬を撫でながらカーテンへと歩きながら問う。

「んとね、今6時半だね。朝ごはんと昼ごはんの準備できてるから
急いで出たほうが良いんじゃないかな？遅刻しちゃうよ？」

「ああ、わかった。そうだ、まだ陸妬のやつ来てないのか？」

遅刻と言われたからと言ってそぐ訳でもなくゆっくりと用意を始める。

「今日もいつもどおり来てないよ。あと10分ほどしたら来るんじゃないかな」

「分かった、ありがとな。優華は送れないように先に行つとけよ」
綺麗に染まった金色の髪をすくように撫でてやると愛おしげに眼を細めて部屋を出て行った。

俺、滝川 海斗と妹の優華は幼い時に母親を亡くしているんだ。

映画に賛成してくれたのだったって新しい母親だった。

そんなこんなのをせいか当時幼かった優華はまだ大丈夫だったが、当時の物心がつきたての俺にとって心を閉ざすには十分すぎる出来事だったんだ。

当時の俺は心を閉ざす自分に戸惑い、急いで1つの仮面をかぶったんだ。

それが俺の初めて身に着けた仮面、薄くもろく素の自分と大差なかったかもしれない。

だが、そうすることで周りの人と普通に接してられる気さえしていた。

それがいけなかったんだ。仮面をかぶれば周りの人が何気なしによってくる。

そう思い出した俺はいくつもの仮面をかぶるようになっていたんだ。それは今でも続いている、幼稚園から高校まで家でさえずっと一緒に居る妹にだって、全てを隠している。醜い自分を隠すかのごとく、だから優華は知らない、俺が昨日のようにパシリ、殴られ、苛められていることを。

おそらく「勇者君」というあだ名さえ知らないかもしれない。

1つ年下の妹にさえ全てを隠している自分が嫌いだった。

だから・・・俺は、

ピンポンゆっくりとならされたチャイムにふと顔を上げる。

「海斗お！おきてつかあ？早く行かないと遅刻するぞお」

やかましい限りの声が家じゅうに響き渡る。

はあ、もう来たのか・・・。

知らないうちに腰を下ろしていたベットから腰を上げてリビングへと足を速める。

「すまん、少し待ってくれ、陸妬」

お弁当を持って急いで玄関に置いてあるスクールバックに押し込む。ただ俺にも少ないが心を許した人が居たんだった。

「おはよう、陸妬」

「おはよっす、海斗」

こいつみたいに。

こいつと過ごす時間は好きだったんだ。バカみたいなことをして馬鹿みたいに笑って友達ってこうゆう者なんだと改めて思わせてくれるような奴だったんだ。

「何見てんだよ、海斗。向こうに夏帆なつほでもいたか？」

陸妬は俺がたっている反対側をきよろきよろと見渡すがそこには誰もいない。

知らない間にジツと顔を眺めていたらしい。

「いや、今日もお前はバカヅラだなんて眺めてたんだよ」

笑いながらそう告げると、健康的に焼けた頬を引くつかせながらグツと首の後ろに腕を回してくる。

「今日もバカヅラで悪かったなあ、え遅刻王の海斗くんよお」
首に回した腕をグツと引き寄せて頭を締め付けられる。

へ、ヘッドロック?!

「ちょ、いたって! うおおお」

必死に抜け出そうと頭を後ろに引く。自分でしていてもなんだが周りから見たら馬鹿らしいことこの上ないと思う。
道のと真ん中でやる事では無いだろう。

「すみません、そこ空けてください」

ほら邪魔になった。

メガネをかけた優等生系の女子に声をかけられる。

登校路のと真ん中でこんな事をしていたら注意されるのは山だろう。
でもされる相手が不味かった。

冷徹と称されるほどルールに厳しく、成績も学校でトップを誇っている我らが生徒会長殿、鏡河 雪原。

生徒会長のくせして朝は弱くいつも遅刻寸前で入門してるそうなの。
ただ目をつけられたが最後、ゆうに1時間は説教されることになってしまうのだ。

ここは一刻も早く謝らなければ。

「すみませんでした!!」

ん? 今声がハモったな。

頭を下げた状態で陸妬の方を見るとこっちを見ながら同じく頭を下げて笑っていた。

「はあ・・・疲れたな」

「朝からあの鬼会長に目を付けられるなんて今日ついてないぜ」
遅刻ギリギリに入門した俺たちは下駄箱で雑談していた。

あの後、きつちり30分も説教されていたことは思い出すだけでも頭がいたい。

あと30秒遅かったら遅刻していたに違いない。

「ホント運がないよな」

靴箱を開けながら陸妬の方を見て苦笑する。

「ん？なんか入ってるぞ、海斗」

陸妬の手が靴箱に入れてあったものに触れる前に急いで奪い去ってポケットに突っ込む。

毎度のパターンで言う赤髪と剃り込みの命令書に違いない。

一つ言うなれば陸妬は俺の苛めについて何も知らないのだ。

「も、もしかして・・・」

途端にアワアワし出す陸妬に、勘付かれたかと慌てるがすぐに落ち着く。

なぜならって？

「ラブレターか？！畜生お前にもついに春が来たか」

とんでもなく鈍感だから。

今時ラブレターなんて・・・しかもノートの切れ端をそう思う奴なんて鈍感以外の何物でもない。

1の続きです(新)(後書き)

ちよつとずつ更新します

1 第2章 僕たちの明日（前書き）

前回の続き八更新してあります^^^；

お手間をおかけしてすいませんm（）（）m

どうぞ御ゆるりと（サッ）

1 第2章 僕たちの明日

廊下で陸妬と別れた俺は自分の教室のドアをゆっくり開く。

何人かの目がこちらを向くが、すぐにまた別の人との会話へと顔を戻す。

「おはよう、滝川君」

「ああ、おはよう」

俺の隣の席のメガネに声をかけられる。

いつもニコニコしていて、気持ち悪いほど頭が良い事を覚えている。ゆっくりと自分の椅子を手前に引くと崩れ落ちるように腰を下ろす。

「はあ・・・疲れたな」

ポケットを漁^{あさ}ってノートの切れ端を取り出すと、ゆっくりと開く。

どうせ今日の昼ごはんのメニューが書かれてるんだろう。

一回ノートの切れ端を開いて、あれ？と目をしかめる。

いつもは2つ折りなのに今日は4つ折りだ・・・。

『勇者君へ』

明らかに書いたのが赤パツのグループではない事が一目でわかった。何より、そこそこきれいに書かれた字から赤パツグループの者の手紙ではないだろう。

それに命令の紙にわざわざあだ名を書くななんてめんどくさい事はあいつ等はしないはずだ。

なら誰だ・・・。俺をあだ名で呼ぶ奴なんて基本的に不良と決まってる。

新しい不良からの物か・・・。

思わずゴクリと生唾を飲んでしまう。覚悟を決めると慎重に紙を開いていく。

あと少し・・・震える指先を抑えて慎重にあげていく。

「はあくい出席取るぞ」

空気を読まず入ってきた担任が俺の最後の一声？を押しとどめさせる。

長い溜息を吐きだすと担任に目をやる。

「うん、全員いるな。よし今日は一つ良いイベントがあるぞ」

イベントって。思わず苦笑しながら次の言葉を待つ。

「な、なんと転校生がうちのクラスに来るのだ！」

ジャジャアーンとでも言いたげに両手を広げる、25歳独身教師の胸が弾むのを横目で見ながら高すぎるテンションにあきれていると、ガラツと前のドアが開くのが聞こえた。

おお！！と感嘆の声が上がるのが聞こえるが俺にはそんな事は関係ない。

どうせ新しい人が来ても仲良くなど成れないのだから。

机の前で2つ折りで待機していたノートの切れ端をまたゆっくりと開き始める。

「じゃあ、挨拶でもして貰おうかしら。じゃあ宜しくね」

ノートの隅の方に小さい字で名前らしきものが書いてあるのが見えた。

えっと・・・紺野こんの 紫水しすいって読むのかこれは？

「私の名前は紺野こんの 紫水しすいです。クラスに滝川君という人が居ると聞いています」

おかしいな・・・この切れ端に書いてある名前と一緒に名前が聞こえてきた気がする。

それに俺の名前が呼ばれた気が・・・。

思い切って切れ端をめくり上げる。

そこに書いてあったのは、

目に立つ少女は、

『滝川君、勇者であるあなたのための世界があるの』

一言一句切れ端に書いてある文字と同じ言葉が前から聞こえた気がした。

第2章 僕たちの明日

バツと顔を上げた俺の顔にいくつも視線が突き刺さった。

いつの間にか目の前に来ていた、転校生 紺野紫水。

銀色とでも言おうか・・・透き通るように白い髪は腰まで伸び、女子にしては少し背が高く顔は人形のように整っている。

思わず見とれてしまう俺に彼女はまたあの言葉をつぶやいた。

「あなたのための世界があるの滝川君」

「・・・へ？」

驚きからか声が余りでない。どうやらその状況に陥っているのは俺だけじゃないみたいだ。

口をパクパクしながらこつちを見ているクラスメイトが見て取れる。

「少し来て」

一言いうと俺の手を取って教室の端にあるドアへと引張っていく。ガラッとドアを開けると、失礼しましたとでも言う様に一礼するとドアを閉めて完全に廊下に出してしまった。

「・・・ええええええ！？」

俺が言いたい気分だよ。心の中で突っ込みながらも前で手を引いて歩く少女の姿を見る。

「ちよ、え、えと何か用かな・・・」

「少して良いから黙ってついて来て」

小さくて柔らかい手とか髪から漂ってくる異様にいい匂いとか、階段を上って左右にフリフリと揺れるスカートなどいろいろ誘惑から自我を守りながら、大人しく少女の後をついていく。

階段を2回分上がったところを見ると屋上か・・・。

そう思うと脂汗がダラダラと垂れる。基本的に屋上には常に不良が溜まっているのだ。

その下っ端？幹部と名乗っているが赤バツと剃り込みもいるのだ。

「な、なあ屋上に行くなら止めといたほうが良いと思うんだが・・・」

「君みたいなかわいい子が行くと何をされるか……かと言って俺が守れるわけでもない。」

逆にボコられるのがオチだ。

「良いの分かってるから」

何がわかってるのか気になる……後ろで脂汗をかいている俺の手をぎゅっと握ると屋上へ通じる最後の階段へ登り切った。

1) 第2章 僕たちの明日(後書き)

また近いうちに更新します。

2の続き(その1)(前書き)

早くも更新です^^;

30人オバーのお客さんがいるとわ少し驚きです>ワ<

どんどん書いていくのでお願いします。

なんか急展開なきが・・・;;;

すぐ更新するので再度来られた時は量が増えちゃうと思います(眠いので寝させてもらいます)

2の続き(その1)

少女は、さび付いたドアをそっと開けた。
少しずつ開けられるドアから漏れる光は俺たちを真っ白に染め上げた。

「ようこそ、名もなき物語へ。勇者さん」

屋上だったはずのソコはすでに違う場所になっていた。
いやすっぽり消えているとでも言うべきか・・・そこには一面に空が広がっていた。

目の前を雲が横切り、心なしか空気が薄い気がする。

いや実際に薄いのだろう、思わず身を乗り出して下をのぞきこんだ俺はとっさにそう理解した。

屋上だった所は山さえ小さく見えるような場所と入れ替わっていた。
思わず戸惑い後ずさる俺の隣でいきなりにこやかな声が響く。

「私たちのための世界だよ。あなたを待ってる人が居る。だから私
があなたを導くのっ」

転校生にいきなり連れてこられて、それでもって屋上が消えてて・・・。

また数歩後ずさる。余りの事に脳が否定に入る。

それを見た転校生こと紺野さんは

「何処からともなく生まれ、誰からともなく取り込まれた幻想の世界・・・孤独な人のための世界」

2の続き(その1)(後書き)

明日にでも更新します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0091z/>

フェアリー・チルド

2011年12月16日02時45分発行